

# 引揚げの物語の神話的水準と かかわりあう一書

戦後そして現代日本の社会や文化を眺める風景を一変させる可能性をもつ

野上元



島村恭則 編

## 引揚げの戦後

叢書 戦争が生みだす社会 II

8・15刊 四六判400頁 本体3300円

新曜社

引揚げ研究を読むと、昔読

ある。

んだ小説の一節をいつも思い出す。「あなたは自分が子どもっぽいと思ったが…日本人全体がな…これまで、幸せな幼児だったのじゃな。二千年もの間、この暖かく、やさしい、四つ足の懐に抱かれて…外に出ていって、手痛い目にあつて、またこの四つ足の懐に逃げこんで…子供が、外で喧嘩に負けて、母親の懐に鼻を突っこむのと同じことじゃ…。(略)だがな…おふくろといふものは、死ぬこともあ

るのじゃよ…」という部分である。小松左京の小説『日本沈没』(一九七三年)が思い出されるのはこの一節もそうだが、それが「日本からの避難」という、いわば引揚げの逆を試みる物語だからだ。いよいよ、小松は、単に「逆」を取っているのではなく、選る場所である日本列島そのものを地球上から消失させ、日本人を流民にしてしまおうとしている。そこまですればもう日本人は「幼児」ではいられないという話で、引き裂かれて海に没してゆく列島を母や恋人になぞらえるこの終盤が示しているのは、この作品もまた、「成熟と母性」を主題とする戦後文学の系譜にあるといつていいであろう。構想されただけで執筆されなかったその「第二部」では、いわばこの「強制された移民」によって世界各地(特にアジア各地)に撒かれ混濁しながらも「日本人」たろうとする人々の姿が描かれるはずだったであろう。

引揚げ研究を読むと、昔読ある。

確かに、アジア太平洋戦争の敗戦直後の植民地各地からの「引揚げ」で見られた脱出と帰還の物語には、どこか神話的とかいいたくない水準がある(もうひとつあった。安部公房『げものたちは故郷を指す』である)。こうした脱出と帰還の神話性は、その壮絶な「内容」によってたけではなく、彼らが帰国後になした生活や文化、あるいはそれを通じた「コミュニケーション」によって作り上げられたものでもある。

本書『引揚げの戦後』は、そこに注目する論文集である。編者である島村恭則が第一章「引揚げが生みだした社会空間と文化」において数多くの事例を紹介しながら指摘したように、「引揚げの世界は、まさに『現在』という地表面のすぐ真下に高密度で広範に横たわる歴史的地層の、ときものである」。この指摘がなによりも重要であるし、その探究の必要性については、より広い理論的な枠組み、すなわち引揚げを「移民研究の中で相対化した場合、どのような視座が得られるか」という論点から整理してくれる第8章の辻壇之論文「戦後引揚げという上方法」——帰還移民研究への視座の指摘が重要である。すなわち、「引揚げ」というバルは一方的に押しつけられたものではなからず、(略)「引揚げ」というバルが「固有名詞」化したのは、『等価』だが『異なる』歴史体験、記憶

の提示、帰国前の生活様式の再生産といった『抵抗』による意図せざる協働の結果である。

引揚げ者「帰還日本人」という「異種性」が、「日本人の境界」の調整においてこのように作動したのかを観察しようという研究の理論的射程が提起される。このような視座は、引揚げをめぐる神話を理論的に脱本質化してくれることもするだろう。

一方で(それでも)評者としては、本書がもたらす、学術的な研究書でありながらもどこか血が騒ぐような読書経験についてもう少し考えてみたいと思つた。篠原徹による自分史にもなっている第二章「記憶のなかの満州引揚げ者」の精神生活誌をほじめとる各章の探究は、各所でそれを与えてくれる。既にもう私たちは引揚げをめぐる神話を踏まえて生きているのだとすれば、そうした想像力からスタートして考えてもいいように思うのである。

それゆえに、非常に興味深い指摘が数ある書物であるけれども、対象の性質上、それはときに埋もれてしまった過去に関する「調べ物」とな

り合っているようにもみえた。本書をその一部として構成するシリーズのタイトルを借りていえば、「戦争が生みだす社会」ということであり、この問題設定に各論文はこのように呼応しているだろうか

と、それが気になった。思えば、二〇一一年に死去

した電通会長の成田豊(ウ

ル生まれ)が主導した二〇〇二年日韓ワールドカップ共催から始まる「韓流ブーム」も、ひとつの大きかりな「引揚者文化」ではなかったか。

成田(インタビューする機会はないが、「韓流ブーム」は、引揚者である彼の見た大きな夢であった可能性がある。「埋もれてしまったこと」「マイナーであること」だけが引揚者文化の条件ではないようにも思われる。

ともあれ本書は、神話的水準とかかわりあうことで戦後そして現代日本の社会や文化を眺める風景を一変させる可能性のある論文集である。例えば第3章の稲葉寿郎論文「恩賜財団同胞援護会と土浦引揚寮」では同胞援護と戦後社会福祉の継承関係が指摘されているが、同胞援護が社会福祉という広い社会領域に継承されるべき、というような遺伝子」が残ったのだろうか。もちろん他の章に関しても興味は尽きない。

いくつかの論考にみられる発見は、いずれ単著にかたちを変えて再び公表される可能性があるのではないかと思われた。序章によれば、第8章は各章を踏まえて寄稿されたという。その指摘が各章の「再登場」においてどう咀嚼されているか、あるいはどうまら

ない知見が示されるのか、今から楽しみです。

(筑波大学准教授・社会学)